

法政

特集 日本の新しい芽 No. 62

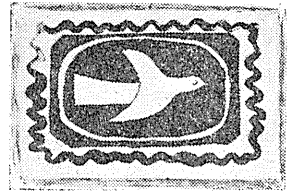
第六卷 第七号

昭和二十七年十一月十三日第三種郵便物認可
昭和三十三年七月一日発行(毎月一回一日発行)



1957 7.

法政大学



都市文化を支える職業

工場労働者は断層を結ぶ要

田 沼 肇

カッパ・ニスを中心した鳥ヶ原ラック
第四回日本国際美術展より

世の中には、じつにさまざまな職業がある。身近かな例でいえば、大学教師も職業の一つであり、総教にして約二万五千人いるが、わが国で二万五千人前後の人々が従事している職業には、大学教師のほかに、主任工、金属プレス工、選炭夫、沖仲仕、消防手、掃除人などがある。これらの職業は、従事者の人数という点では共通の規模をもっているが、その内容は千差万別であり、賃労働としての性格にも差異がある。そして、いずれも社会的に有用な職業であり、もちろん貴賤はないが、その担っている役割にはそれぞれ特質がある。

—自分たちの国を、この複雑な「職業」という断面から調べてみることは、意義のあることにちがいない。なぜなら、都市といわず、農村といわず、すべての人々の生活は、自分あるいは自分の家族が、なんらかの職業をもつことによって支えられているからであ

る。人々は、その職業の種類によって、いろいろな環境に生き、経験をもつこととなる。職業の種類は、人々の体格や服装や言葉や表情ばかりでなく、意識にまで特徴をあたえる。賃金労働者とか、農民とか、都市中産階級とかいうような、原則的な概念だけでは、十分に説明できない雑多な要素が、現実の職業にはまつわりついている。

もちろん、一口に職業といっても、そこには時代にもなる変遷があり、古い職業で徐々に姿を消してゆくものもある代りに、新しい時代の要求に応じた新しい職業も登場してくる。たとえば、明治憲法が発布されたころ、主として都市の交通機関となっていた人力車の車夫は、全国で四十万人ちかくいたが、今日では、輪タクの車夫を合せても、約七千人にすぎなくなってしまった。これに反して、昭和初期にはまだ約七千人しかいなかったタイピストが、今日では四万人をこえ、オフィス街のありふれた職業になっている。

都市生活の象徴の一つであるこのオフィス街でも、事務労働の機

械化・自動化が急速に發展し、事務労働の肉体労働への接近が多くなるの眼に明らかになってきた。いまや「非常に多くの事務労働は、単純な機械的な仕事に帰着させることができる。すなわち、一日あるいは一週間あるいは一月用の指令を準備して、事務員が単にその指令に従いさえすれば、自分自身が判断を下す必要はまったくなく、事務所の仕事は完全におこなわれる、というようにすることとは可能」になってきた（S・リリー『オートメーションと社会の發展』）。

これらの事情は、都市そのものの様相を変え、都市生活者の構成を変え、かれらの生活様式、生活感情、そして意識形態に影響をおよぼさないではない。

しかし、もう一つの、いっそう重要な意味をもつ変化が、職業構成のなかに生じている。それは、とくにさいきん、ある種の職業の従事者が、急激に増加しているという事実である。昭和二十五年と三十年の国勢調査をくらべてみると、この五年間に、もっとも高い増加率を示した職業は、「サービス職業」であった。わが国の国勢調査は、カービン銃の自衛隊員や、ピストルで武装した警察官まで、保安サービスと称してサービス職業に含めているが、それはとにかくとして、同じサービス職業のなかでも、従事者数増加の横綱格は、五年間で二倍以上になった芸妓、ダンサー、接客婦など、社会的に有用でもなく、そのうえもっとも不健全な職業グループであった。元来、わが国のサービス業は、昭和初年の大恐慌期にくらべても、すでに昭和二十五年には従業者総数が約一・三倍にたっしてしたが、さいきんは、さらにその増加が目立つのである。

ついで増加率の高い職業は、「販売従事者」であった。卸売・小

売業全体としての従業者数は、戦前より減少しているという特質（他の産業部門には例がない）をもつが、商品ブローカー、保険外交員、行人などの職業は、さいきん五年間に、一倍半ないし二倍も従事者が増えている。これらの職業は、商業労働のなかでも寄生的な性質がとくに濃く、労働条件は水準が低いうえに不安定であり、その生活は頹廢的な傾向を帯びやすい。

今日、都市生活の一つの側面は、右にあげたサービス職業や一部の販売従業者の急激な増加によって特徴づけられている、といつてよいだろう。なぜなら、これらの職業は、大都市のある都道府県に集中しており、農村を主体とする諸県では、その比重が問題にならないほど低いからである。

都市生活のこのような側面は、資本主義の腐朽化のあらわれにはかならない。すなわち、資本家的浪費の増大、国家機構（とくに軍隊と警察）の膨脹、投機の拡大、競争の激化にともなう広告費の増加、遊興機関の維持の必要、などと関連した現象である。

2

しかし、都市生活の特徴づける要素については、まだ他のいくつかの側面にもふれなければならない。

やや資料は古いが、文部省の調査（昭和二十八年度）によれば、四年制私立大学昼間部学生の出身家庭の職業中、もっとも比率が高いのは「経営者・管理者」（二三％）であり、ついで「販売従事者」（一七％）、「事務従事者」（一六％）、「農・漁業」（一一％）となっている。これを、法政大学のさいきんの統計と比較できれば興味ぶかいのであるが、資料が完全でないので、立教大学の場

合（昭和三十一年度）を掲げておくと、「大企業経営者・高級官僚」（一三・七％）、「経営者」（三二・九％）、「給料生活者」（三八・七％）、「農林水産業」（三・二％）となっており、経営者・管理者の比率は、文部省の調査よりもいっそう高い（立教大学広田ゼミナル報告集『日本の学生』）。

ところで、国勢調査が示すところによると、私立大学学生の出身家庭に多い「管理的職業」の従事者は、さいきん五年間に、それほど顕著な増加をみせてはいない。ただ、税金逃れのための零細規模ともいべき株式会社が乱立した結果であろうか、「会社役員」は、約十六万人から三十三万人へ激増した。しかし、一方では「小売店の支配人・管理者」が約一万五千人から一万人へ減少している。

かつて、大恐慌の直前、昭和三年に出版された前田一氏の『続・サラリーマン物語』（東洋経済新報社）は、「君見ずやサラリーマンを迎ふる満都の艶やかなる狂想曲を……」の書きだして、サラリーマンの生活の享楽面を強調したが、同時にそのかげには、「腰弁裏吏」がひそんでいることを指摘していた。第二次世界大戦後も、ふたたびわが国の都市生活には、年を経るごとに享乐的な面が目立つようになってきたが、それはいわゆる社用族の独壇場で、一般サラリーマンのささやかな享楽とは、雲泥のひらきがある。「腰弁裏吏」は、二十世紀中葉の現実でもあった。

この問題に関連して、日本の近代文学には、明治二十年代の下級官吏やその家族をテーマにした二葉亭四迷『浮雲』、樋口一葉『十三夜』をはじめ、大正末年のサラリーマンを扱った水上瀧太郎『勤人』、『女事務員』など、注目すべき作品が少くない。『浮雲』は、立身出世主義にたいして、いち早く批判的な眼を向けたし、

『十三夜』は、立身出世の確実な男から懇望されているのに腰弁のサラリーマンと結婚したり（これは一生貧乏するということだ）、出世コースの男と離婚することによって弟の昇給に便宜を計ってもらう道をふさいだり（これも貧乏）、そのうえ一人で内職をしてでも暮らしてゆこうとしたりする（これもまた貧乏）のは、昔も今もなかなか勇氣があることを、しみじみと教えている。少数者のみの立身出世を約束する機構が、多数者の人間性を無慈悲に奪いつつゆくこと、そのうえ、とくに日本の社会では、サラリーマンの人間関係にも前近代的な要素が強くからみついていることなど、今日につながる大問題である。これは、都市生活の枠内だけで解決できる問題ではなく、その根源は、農村の生活とも深くつながっている全体的な問題であった。

人間性を抑圧され、しかも前近代的な人間関係にからみつかれがちな日本のサラリーマンには、いくつもの型にはまった人物ができてあがってきた。多くのサラリーマン小説を書いている源氏鶏太は、その型を七つに分類している。曰く、①一等社員型、②万年平社員型、③腰巾着型、④金庫型、⑤夜光型、⑥世話娘型、⑦計画型。

石川達三も、『四十八才の抵抗』で、この問題に取り組もうとした。——ある大きな保険会社の火災部次長を勤める主人公は、若いころには「いささか社会主義にかぶれていた。保険事業に社会保障制度の理想を描いていた」のだが、停年も間近かになってみて、自分のサラリーマン生活が「いつの間にか資本家の利潤追及の奴隷となり終せ、……重役と株主のために青春を使い果してしまったこと、それだけだった」と気がついた。そこで、かれは四十八才の抵抗を試みるのだが、せいぜいのところ、独りひそかに快樂をたの

しむというだけのもので終り、けっきょく「サラリーマンにとつては、やはり職場が一番の生き甲斐ある」ところだと考えなおし、涙さえ流すのであった。

源氏鶏太の分類はもちろんのこと、石川達三のひろく読まれた作品にしても、都市生活の吹きだまりで苦悩しているサラリーマンの問題に、光明を投げかけたとはいえないようである。

3

いま、私の手許に、週刊雑誌について某社のおこなった調査報告書がある。この調査によると、東京都二十三区全体で、一カ月間に一回でも、いずれかの社の週刊雑誌を購入した世帯は、全世帯の五三・六％ということになっている。これは、まことに驚くべき売れゆきであった。

しかし、この数字の内容を、東京都下でもっとも販売部数が多い某誌だけについて、やや詳しく検討してみよう。問題は、どのような職業の世帯で多く読まれているのか、という点である。結果は、第一位「事務職」世帯の一六・八％、第二位「商工・サービス業」世帯の三・七％、第三位「労務職」世帯の三・六％、第四位「自由業・管理職」世帯の三・一％、第五位「農林漁業」世帯の〇・二％であった。ごらんのとおり、「事務職」世帯が飛び抜けて高い比率を示している。いうまでもなく、某誌一誌だけの調査結果で多くの結論をひきだすのは危険であるが、すくなくとも、週刊雑誌はサラリーマン層に圧倒的な読者をもっていること、そして、サラリーマンと他の職業従事者とのあいだには、意外に深い断層があることは確かである。やや我田引水の筆法を使うなら、工場労働者は、一部

の人々が強調しているほど週刊雑誌を読んでおらず、すくなくともこの分野では、意識の面でサラリーマン層とのあいだにへだたりがつくられていのではないだろうか。私が、かざられた行動半径ではあるが、工場労働者と面接した実感でも、どうもこの結論の方がびつたりするようである。

この小文では、都市生活者を、「サービス職業」と「販売従業者」、それに「事務従事者」を加えて、一般にサラリーマンで代表させてきた。しかし、わが国の職業構成をみると、この三つの職業を合計しても全就業者の約二一％を占めるにすぎず、鉱工業、運輸関係の職業に従事する者が、全就業者の約二五％を占めていることを、忘れるわけにはいかない。そして、工業関係職業と運輸関係職業の過半数が、都市生活者である。とくに、全国市部人口の約三六％を、工業関係職業で占めていることは重要である。

今後の課題として、私たちが都市と農村の結びつきの問題を語るべき、工場労働者の動向が、重点的に考えられなければならない。都市と農村を、文化的にも、政治的にも、民衆の力で結びつけてゆくには、おそらく長い期間にわたる努力が必要だろう。しかし、都市を代表するものがサラリーマンや、その生活様式、生活感情だけでなく、工場労働者の問題としても取り上げられるなら、課題を一步前進させることができるにちがいない。

― 大原社研所員 ―

× × × × ×

× × × × ×

編集兼発行者 友岡久雄 印刷所 東京都千代田区神田三崎町2-3 千代田印刷
 発行所 東京都千代田区(麹町局区内) 富士見町3-1 法政大学



40年の研究と500万脚の実績

特許FK式廻転椅子
 特許寿式学生机椅子
 特許高式連結椅子
 特許寿式折畳椅子
 一般家具設計製作



株式会社 寿商店

本社 工場

東京都千代田区有楽町1-14
 TEL (59) 1311(代表)~1315

東京都武蔵野市境1400
 TEL 武蔵野3862・4438・7213

キ
 の
 コ
 ー
 プ
 の
 子
 椅

昭和二十七年十一月十三日第三種郵便物認可
 昭和三十三年六月二十日印刷(毎月一回発行)
 昭和三十三年七月一日発行

法政

七月号

第六卷 第七号

定価参拾円(送料四円)

各種運動施設工事専門

陸上競技場
 テニスコート
 野球場 其他
 新設・補修
 設計・施工



株式会社

木下スポーツ建設

取締役社長 木下 溪 司

本社 東京都世田ヶ谷区烏山町381
 電話・松沢(32)5206番